

修士論文題目「エリートアスリートはなぜセカンドキャリアで教員を選択したのか」
：「プロ野球選手」と「Ｊリーガー」の事例をもとに

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科 スポーツクラブマネジメントコース

5020A303-3 飯尾哲司

研究指導教員：間野義之 教授

《要旨》

【第１章／緒言】

2019 年 11 月、萩生田光一・文部科学大臣は「世界水準のアスリートを引退後、教員特別免許で体育教員として採用する」と、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックのレガシー（遺産）について言及した。

アスリート引退後の社会参画は、アスリートの「セカンドキャリア」の選択肢拡大、学校側の「部活動指導の負担感解消」の観点から五輪にかかわらず**重要なテーマである**。

専門的な知識技能を有するプロ野球選手になれるのは 1 年約 70 人（12 球団）、Ｊリーガーは 1 年約 1 0 0 人（56 クラブ）だけである。本研究においてプロ野球選手（１軍・２軍）とＪリーガー（Ｊ３以上）を「エリートアスリート」と定義した。

野球界とサッカー界にはそれぞれ“指導者ライセンス”がある。野球界は、プロとアマの四半世紀の断絶を経て、2013 年から研修会を受講すれば、教員免許がなくても元プロ野球選手が学生を指導できるようになった。一方、元Ｊリーガーは「日本サッカー協会指導者ライセンス公認Ｃ級コーチ」があれば、教員免許の有無にかかわらず、元より高校サッカー部を指導できた。

【第２章／先行研究】

エリートアスリート関連の「セカンドキャリア」の研究は、日本では 1990 年代に入って盛んに行われるようになった。

「エリートアスリート」に関しては海老

原(1993)の「トップアスリートの光と影」、豊田・中込（2000）の「アイデンティティ再体制化」、井上（2009）の「職業としてのアスリート」、ウルヴェ（2018）の「競技引退理由」。「Ｊリーガー」に関しては小川（2009）の「引退時におけるキャリアトランジション」、高橋・重野（2010）の「キャリアの転機」、上代・野川（2013）の「自主的、非自主的な引退」。「プロ野球」に関しては篠田（2008）の「監督・コーチに登用されるための要因」の論文が代表的である。

以上の先行研究から元アスリートが「選手役割」に執着し、第二の人生に順調に移行するのは容易ではないことが明らかになっている。上代・野川（2013）は、スポーツに影響を受けて形成されたアイデンティティが非常に強いため、スポーツからは離れられず、適応には 2 年近くかかる。また「事前に引退後の計画」を立てることが、円滑なキャリアトランジションのために効果的な対処方法であると報告する。

【第３章／目的】

本研究では「エリートアスリートはなぜセカンドキャリアで教員を選択したのか」の要因を、明らかにすることを目的とする。

【第４章／研究方法】

データ収集＝半構造化インタビュー。

データ分析＝修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-G T A と表記）。

言語的表現＝質的研究を用いた。

データ収集（インタビュー）は、主題が

「理論的飽和化」(木下, 2007) に達したと判断して終了した。「元プロ野球選手・教員」9名, 「元Jリーガー・教員」7名. 研究参加者は, 最終的に合計 16 名になった. インタビュー平均 61 分. 平均年齢 42.8 歳, プロアスリートとしての現役年は平均 6.1 年, 教員歴は平均 10.3 年である.

【第 5 章／研究結果】

収集した生データ(インタビューの録音)をトランスクリプト(テープ起こし), 逐語録にした. 類似性ある発言を集め「概念」とした. 1 概念につき 1 ワークシートを作成, ワークシートの廃止と統合を繰り返した.

結果, 合計 16 名の逐語録から 18 個の「概念」を抽出し, 類似性でまとめた 8 個の「カテゴリ」を構築, さらに大きな 4 個の「コア・カテゴリ」を生成した. 特に「概念を抽出する」時点において他者(研究協力者)のチェックを挟み, コーディングの解釈に「信頼性と妥当性」の担保を図った.

結果は「〔後援者の支援〕〔部活動を指導〕〔生計の手段〕〔社会に貢献〕という理由によって, 元エリートアスリートはセカンドキャリアにて教員を選択する」に至った.

【表3／計16名の教員選択要因 延べ64個をカテゴリズ】		
コア4個	カテゴリ 8 個	概念18個
(I) 後援者の支援	【A】重要な他者の影響	(a-1) 親族の言動に感化
		(a-2) 恩師の言動に薫陶
		(a-3) 知人の言動に触発
	【B】受動的な機会	(b-1) 学校から入職の勧誘 (b-2) 教員の補充
(II) 部活動を指導	【C】人的資源の活用	(c-1) 元プロ競技者の知識と技術を活用 (c-2) 取得済み教員免許を実際に行使
	【D】部活動の指導を希望	(d-1) 専門競技の指導を希望 (d-2) 自分の競技継続の手段
(III) 生計の手段	【E】生活基盤の安定	(e-1) プロスポーツとの比較 (e-2) 安定収入かつ競技指導
	【F】職業としての競技指導	(f-1) 自己実現のステップ (f-2) 競技指導者としての目覚め
(IV) 社会に貢献	【G】教育への関与を希望	(g-1) 憧れの職業 (g-2) 教員としての教科指導 (g-3) 競技を通しての人間教育
		(h-1) 教員の人材育成は「地域貢献」に効果的 (h-2) 培ってきたものを地域の子供たちに還元
	【H】地方創生	

【第 6 章／考察】

4 要因に伴う考察の中心は以下の通り.

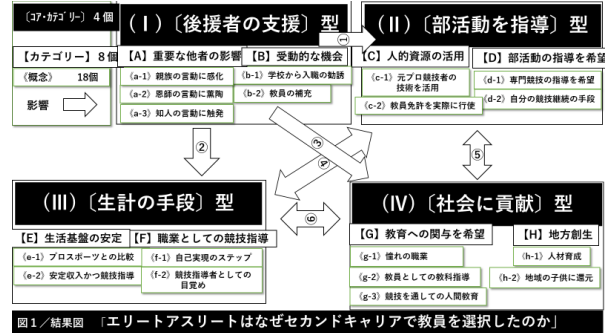
(I) 後援者の支援 = 重要な他者の影響で.

(II) 部活動の指導 = 人的資源を生かして.

(III) 生計の手段 = 「職業としての

競技指導」の選択肢浮上.

(IV) 社会に貢献 = 対照的な「憧れの職業」.



【第 7 章／結論】

「エリートアスリートはなぜセカンドキャリアで教員を選択したのか」. 4 つの要因が明らかになった. 〔後援者の支援〕〔部活動を指導〕〔生計の手段〕〔社会に貢献〕である.

特に〔後援者の支援〕を受けて教員になるエリートアスリートが多い. また, みずからの人的資源を活用して部活動指導を希望するプロ野球選手, 同じく, みずからの人的資源を活用して生計の手段とする J リーガーが多いことが明らかになった. つまり野球は「部活」, サッカーは「生活」である.

従前に, オリンピアン・Jリーガー・プロ野球選手のセカンドキャリアに関する質的・量的研究は行われてきた. しかし「教員」にフォーカスした研究は未だほとんど見られない. 「プロ野球選手」と「Jリーガー」をセカンドキャリアの観点から同時に扱った研究も同様である.

今回の研究結果が, 今後教員を目指すプロアスリートの「アイデンティティ(自己の存在意義)再体制化」の事前の動機づけになり, 順調なキャリアトランジションを促す一助になれば幸いである.